

第3節 庄内川中流域右岸の弥生遺跡の実態

1. 「勝川遺跡町田地区」設定について

町田遺跡と地蔵川対岸の段丘上に勝川遺跡があり、まずその両者の関連について考えていく。町田遺跡については、第1章～第3章で述べてきたように、東・西微高地上に竪穴住居跡と方形周溝墓が確認でき、弥生時代にムラが存在したことが判明している。勝川遺跡との距離は、わずか数百m程であり、両者の関わりについて2つの遺跡とするのか1つの遺跡群として把えていくのか二つの解釈が成り立つ。

勝川遺跡は、昭和56～63年度にかけて多数の小調査区を設けて発掘調査を実施している。小字名を引用して南東山地区・上屋敷地区・苗田地区の3区分して全体を把えることができる。南東山地区は春日井市教育会が昭和44・45年に調査した南東山遺跡である。南東山地区では約1,500m²に7軒の竪穴住居跡が確認でき、弥生時代中期が3軒・後期が4軒で、そのうち最も古いものはS B02の西志賀II b期（朝日期⁽¹⁾）という。勝川遺跡63B区S D01⁽²⁾や62J区S D22⁽³⁾は、上層がかなり削平された幅2～3m・深さ0.5m程の溝が確認できた。63B区S D01は長さ10m程、鳥居松段丘上縁辺に沿って東西に延びる溝で、62J区S D22は長さ5m程の南北に延びる溝であり、両方とも溝底より弥生土器が多く出土した。土器の時期はどちらも高蔵期であり、その頃に埋没されたのであろう。S D01とS D22の溝の北東側に南東山地区の竪穴住居跡が位置し、この2条の溝が環濠になるだろうと推測できる。環濠に囲まれた居住域の西側に方形周溝墓が48基確認されている。主体部はほとんど無く、周溝のみを一部確認したのが多数で、周溝内より遺物があまり出土しないため、時期や規模に関しては不十分である。しかし現在、弥生中期のもの13基、後期18基、古墳時代初頭2基、古墳時代（須恵器出土）6基の計39基が確認されており、これらによって墓域を形成している。

鳥居松段丘下に立地する苗田地区は、昭和56・62両年度で発掘調査をした結果、掘立柱建物29棟・溝1条、棺材埋納土坑2基が確認された。62F区S D01では、溝底の大きな凹み（S X01）から木器の未製品が大量に出土している。掘立柱建物やその木器の出土状況からみて、木器加工の場所という解釈もなされている。棺材埋納土坑（S X01・S X02）はその板の材質がコウヤマキであり、しかも190×50cm、厚さ7cmを測る板材は、長辺を下にして立った状態で5枚並列になって出土した。材質や上屋敷地区で墓域を形成していることを考えると、これらの板材は主体部の棺に使用されたであろうと推測される。

以上のことから勝川遺跡は、この周辺地域にあって中心的な拠点集落であろうということは否定できない。再び町田遺跡に転じれば、そこでは弥生時代中期後半と弥生時代終末期頃の2時期に、人々が生活したということがいえる。母村と分村という大阪府安満遺跡周辺でみられるようなムラの形態がいえるのかどうか、愛知県朝日遺跡の南・北集落と東・西墓域が一体となって一つの遺跡を構成する形態をみると、町田遺跡のみで一つのムラを構成していくのは無理があるよう感じられる。むしろ勝川遺跡群として含めて考えていく方が全体の様子がより詳しく解明できると考え、町田遺跡の弥生時代の遺構を「勝川遺跡町田地区」という把え方で今後進めていくことにしたい。

2. 勝川遺跡「町田地区」の遺構の時期

竪穴住居跡や方形周溝墓・溝など多数の弥生時代の遺構が確認できた。限られた調査区のため遺構の一部しか調査できないものがかなりあり、現状の様子から判断して考えていく。

(1) S D03 (溝)

大量の土器が出土し、一括資料として十分の内容をもっている。壺A・Bの口縁部の凹線文の手法の採用や、甕A（106・107）の胴部の叩き手法の採用など畿内で普通にみられる内容をもっている。高杯では畿内地域出土の形態（129・130）と近似しているが、甕では台付甕が登場してくるなど煮沸用の土器は在地のものがみられる。甕A・Bでは、口縁部に刻みを施したり、縦方向後横方向の刷毛目を施したり、東海地方個有の技法といえる。甕Bなど口縁部を折り返しするもの、甕Cは口縁端部を上方につまみあげるものなど形態差がみられる。壺の胴部破片の中には、格子文・扇形文・流水文など畿内的様相のものやヘラ描きの文様など三河地域の古井式・獅子懸式土器と近似するものが含まれており、周辺の諸要素をもつ土器が混在して出土するという興味深い内容である。それらの内容からみて、中期後半の高蔵期という時期に相当する良好な資料といえる。

(2) 方形周溝墓

町田地区で4基確認でき、全体の平面形態が解ったのはS Z01のみであった。4基のうち3基が4隅の切れるものであり、もう一基はL字状をなす周溝で、いずれも主体部など棺と思われるものは確認できず既に削平されてしまったのだろうと考えられる。周溝内より若干の遺物が出土したが、時期が確定できる程の内容ではなく平面形態から判断するしかない。S Z01・S Z02は1つの周溝を共有する2基の方形周溝墓であり、S Z01を先に造り、次いでS Z02を造ったことが窺える。S Z03はL字状の周溝を検出し深さも大変浅いものである。S Z04は1辺の周溝を検出し、底面より壺（300）が出土した。その土器はゆるやかに外反する口縁部で端部は方形状におわる。頸部に列点文が2帯施文された他は磨滅で十分に解らない。それらの内容から時期を決めるのは困難であるが、およそ中期後半～後期初頭に位置づけることができるだろう。

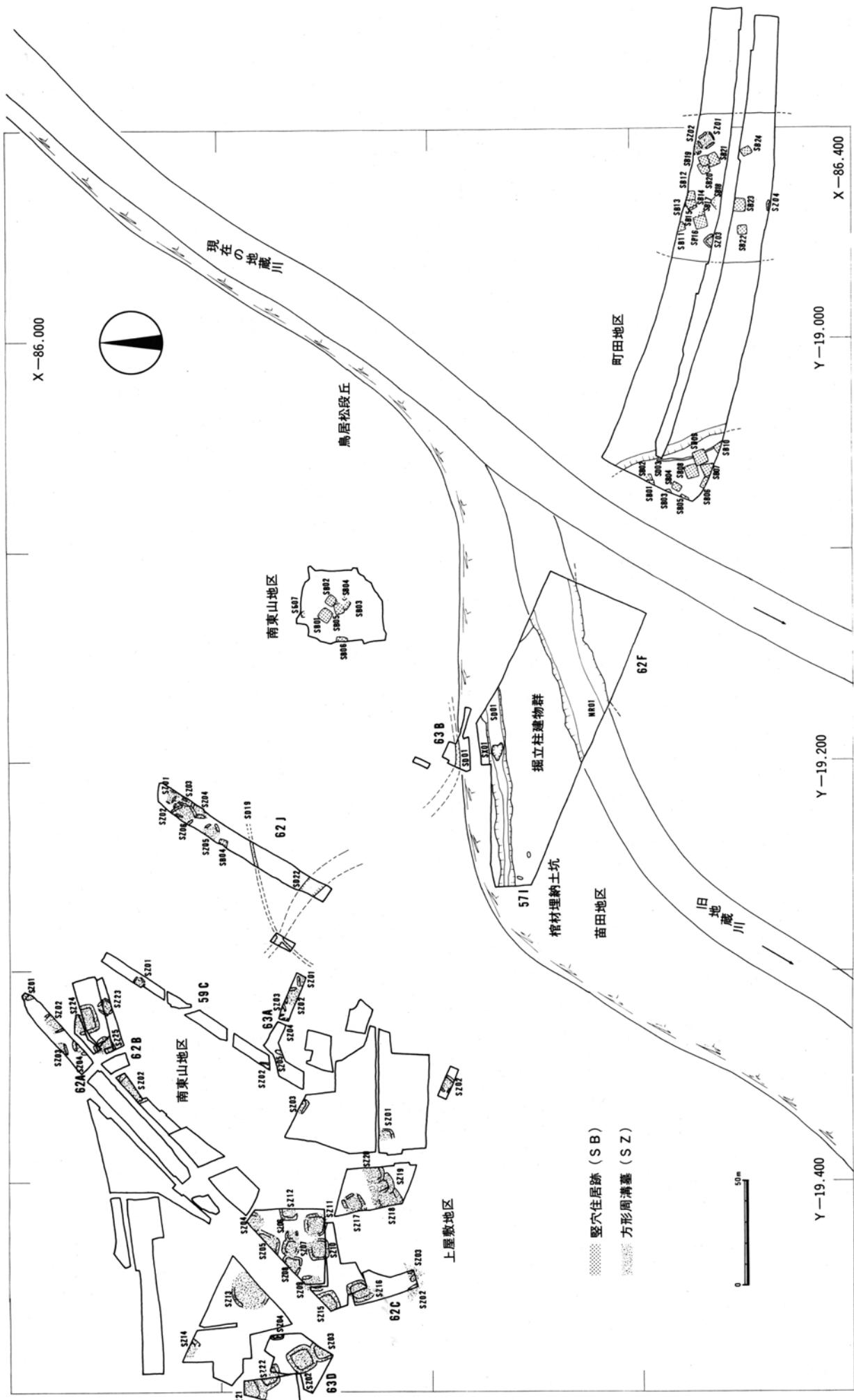
(3) 竪穴住居跡

東微高地14軒・西微高地10軒を検出し、いずれも方形状の平面形態である。しかしそれらの中でも個々をみていくと、多少の時間差を把えることができる。

中期後半の竪穴住居跡は2軒ある。S B05は東側の1部を調査し、壺165・甕166が出土し、S D03出土土器と類似する。S B23は南側の大半を調査し、外面に条痕文を施す壺287が出土する。

後期前半はS B02・S B10がある。S B02は壺153・甕154～156が出土し、S B01によって切られているのでそれより古いといえる。S B10は甕216・217、高杯218が出土し、S D03埋没後につくられたものである。

後期後半は10軒みられた。S B01は鉢152が床面で倒立の状態で出土し、尖底気味の平底である。S B03は台付甕157や中位がくびれる器台159が出土している。S B04は高杯163が出土し、直線的に外下方へのび脚端部が内側にのびている。高杯161は混入であろう。S B07は台付甕175・高杯167・177・179が出土し、177は脚部が屈曲するかもしれない。S B12は甕219・220・高杯221が出土し、219は口縁部が外反気味で端部は丸くおわる。S B15は杯底部より口縁部が外反し、端部は方形状におわる。



第35図 勝川遺跡遺構配置図（調査区名は関係分のみ記す。1 : 2500）

第16表 勝川遺跡主要遺構計測値

遺構名	方位	規模(m)			時期
		長さ	幅	深さ	
勝川'84 S Z01	N-5°-W	(7)	0.8~1.0	0.2~0.4	
" S Z02	N-49°-W	8	0.8~1.2	0.3~0.5	
" S Z03	N-54°-W	(7)	0.4	0.15	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z04	N-6°-E	—	1.0~1.2	0.1	
" S Z05	N-26°-E	—	1.0~1.4	0.2	古墳時代初頭
" S Z06	N-4°-E	6	0.7	0.1	
" S Z07	N-71°-W	8	1.4~1.6	0.15	
" S Z08	N-10°-E	9	1.0~1.2	0.2~0.4	
" S Z09	N-14°-W	(10×8)	1.2	0.15	古墳時代初頭
" S Z10	N-8°-W	10	1.0~1.6	0.1~0.5	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z11	N-8°-W	11	1.3~1.4	0.15~0.3	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z12	N-6°-E	9	1~1.4	0.15~0.4	
" S Z13	円径	径16m	1.2	0.2	古墳時代(須恵器出現後)
" S Z14	N-59°-W	—	1.5~2	0.2	中期前半
" S Z15	N-26°-W	12	1.5~2	0.6~0.7	後期
" S Z16	N-23°-W	10	1.0~1.8	0.15~0.3	後期
" S Z17	N-17°-W	9	1.0~1.5	0.2~0.3	後期
" S Z18	N-26°-W	(12)以上	2.0~2.2	0.5~0.6	後期
" S Z19	N-22°-W	9	1.8~2.0	0.3~0.4	後期
" S Z20	N-12°-W	7	1.5~1.8	0.5~0.6	後期
" S Z21	N-31°-W	(15)	3~3.5	1	
" S Z22	N-25°-W	9	1.8	0.8~0.9	後期
勝川'88 S Z23	N-52°-W	8.4×7	0.35~0.5	0.63	中期後半
" S Z24	N-17°-W	14	0.6~1.2	0.65	後期
" S Z25	N-21°-W	7.5	0.8	0.85	後期
59C S Z01	N-50°-W	5.6	0.8	0.5	中期後半
" S Z02	N-7°-E	—	0.9	0.1	古墳時代(須恵器出現後)
62A S Z01	N-30°-W	—	2.5	0.2	後期
" S Z02	N-27°-W	9.5	0.5	0.2	後期
" S Z03	N-14°-W	(8)	1.0~1.2	0.3	後期
" S Z04	N-1°-W	—	0.2	0.2	後期
62B S Z02	N-36°-W	17.5	1.5~2.5	0.53	中期後半
62D S Z02	—	—	(2.5)	0.3	後期
" S Z03	—	—	2.8	0.2	後期
62J S Z01	N-50°-W	6.0	0.7	0.14	中期後半
" S Z02	N-72°-W	6.8	0.7~1	0.44	中期後半
" S Z03	N-65°-W	(6)	1.0	0.2	中期後半
" S Z04	N-75°-W	(9)	1.6	0.6	中期後半
" S Z05	N-28°-W	(7)	1.0~1.4	0.3	中期後半
" S Z06	N-31°-W	(10.5)	1.2~1.5	0.34~0.4	中期後半
63A S Z01	N-6°-W	(7)	1.2	0.6	中期前半
" S Z02	N-7°-W	(9)	1.0~1.3	0.35	中期後半
" S Z03	N-17°-W	(7)	0.7	0.25	中期後半
" S Z04	—	—	0.8~1	0.25	中期後半
" S Z05	N-18°-E	—	1.5	0.5	古墳時代(須恵器出現後)
63D S Z02	N-34°-W	—	1	0.3	後期
" S Z03	N-22°-W	8	1.0~2.2	0.2	後期
" S Z04	N-16°-W	7	1.5	0.2	後期

*南東山、勝川'84や勝川'88は発掘調査報告書による遺構名であり、その他は調査時の遺構名を用いた。

遺構名	方位	規模(m)		時期
		長さ	深さ	
南東山 S B01	N-59.3°-E	5	0.15	後期
" S B02	N-6.7°-W	4.5×3.9	—	中期後半
" S B03	N-26.7°-W	4	—	後期
" S B04	—	—	—	中期後半
" S B05	N-4.3°-E	4.5×5	—	後期
" S B06	N-18.3°-E	4.5	—	後期
" S B07	N-9.3°-E	2.5	—	中期前半
62J S B04	N-23.3°-E	4.2×3.2	0.2	中期後半

S B16は甕234、高杯236が出土し、236は脚部が外反している。S B17は壺248が出土し、上げ底の底部であり、瓢型壺であろう。S B21は壺276・277や高杯が出土し、276・277は口縁部が外反している。S B24は壺288・小型器台が出土し、299は受部中央が貫通する脚部である。それらの堅穴住居跡出土の土器は完成品がなく、時期の決め手に欠けるものであり、全体では壺は文様が消失し、甕は台付で外方へのびている。そこで宮腰健司・赤塚次郎両氏⁽⁴⁾の編年案にあてはめると、宮腰氏の4～6期、赤塚氏の元屋敷様式前半期に相当する。

古墳時代前期は6軒見られる。S B06は小型器台の受部180が出土している。S B08はS字甕193・194・205～207、小型器台198・199・201・小型丸底壺202が出土している。そのうち193はS字甕C類である。S B09は高杯215が出土し、杯部は外方へのび、脚部は外反しながら外方へのびる。S B14は鉢231が出土し、胴部下位が膨らみ、パレススタイル壺の胴部に近似する。S B19はS字甕が出土し、C類に相当する。S B20は小型器台259・260・高杯274・275が出土し、259・260は杯部が椀状であり、274・275は脚部が外反しながら外方へのびる。それらの堅穴住居跡の時期は、新しい土器の内容を重視して、前述の両氏の編年案と対比して古墳時代前半期としたい。S B19とS B20は調査時と報告時とで遺構の切り合い関係が逆となってしまい。若干の問題点をかかえている。町田地区以外の南東山・上屋敷・苗田地区の各遺構については、『報告書』や『年報』で紹介されているので個々についてはふれず、第16・17表という形で載せておくことにする。上屋敷地区の方形周溝墓の中には、須恵器をもつものも5基あるが、町田地区では確認できていない。調査区外の微高地についても、おそらくみられないだろうと思われる。

3. 勝川ムラの復元

勝川ムラ全体の様子を概観すると、中期前半に南東山地区S B07に人が住み始めた。この時期の墓には63A区S Z01がある。その頃の環濠の有無については言及できない。しばらく安定した生活を営んでいたが、中期後半になって大きな変化が見られる。遺構の数が増え、それに付隨して遺跡が大きく拡がり、環濠が作られたのである。南東山地区S B02・S B04、上屋敷地区62J区S B04の堅穴住居跡が作られ、62J区S Z01～S Z06、63A区S Z02～S Z04、59C区S Z01、62B区S Z02、S Z23が作られ、明確な居住域と墓域が形成された。その両者の間に62J区S D22、63B区S D01の環濠が作られた。両者とも上部はかなり削平され、S D22は幅3m・S D01は幅1～2mで、深さは両方も30cm程である。その比高差は1mあり、北から南へ水が流れるようになっていて、それが苗田地区62F区NR01に注いだようだ。しかしその2つの確認した溝の底面より大量に土器が出土し、中期後半から後期初頭までの短い期間に埋まってしまったようである。そして町田地区にもS Z01～S Z04やS D03のように人々が住み始めた様子が見られた。人口増加に伴う居住域の拡散であろうし、その頃尾張平野一帯で微高地が出現するという北野信彦氏⁽⁵⁾の考えがあり、参考としたい論考である。62F区S D01内のS X01という深溜りの場所では木器の製作途中のものが大量に出土したり、S X01とN R01の間の平地では、掘立柱建物が約30棟確認できたりして、木器製作の空間であろうと解釈されている。57I区では、棺材埋納土坑が2基検出した。上屋敷地区の墓域と強い関連性をもっている。後期前半～後半にかけて南東山地区ではS B01・S B03・S B05・S B06が中期と同じ所へ堅穴住居跡が

作られているのに対して、方形周溝墓では62A区S Z01、S Z02、S Z03、勝川'84 S Z18~20、S Z15~17、S Z08、S Z22、S Z23、S Z24、S Z25がある。居住域はほぼ一定の場所であるが、墓域は中期の墓域より北へのびる一群と西へのびる一群と2つに分かれる。古墳時代前半にはS Z04、S Z05、S Z09があり、古墳時代中期、5世紀末~6世紀初頭はS Z11、10、13、59C区S Z02で、S Z13は円墳であり、2群の墓域の西側のみが存続していたのがわかる。もう一方については何とも言えない。墓域をみていくと、数多くあるうちでS Z15のみに主体部が確認できた。その大きさは長さ2.3×4m（木棺：1×3m推定）、深さ28cmであり、おそらく木棺直葬であろう。周溝から内外面をヘラ磨きした壺と、外面を丹彩した壺の胴部下半部のみが出土し、後期終末頃と思われる。そしてS Z18~20や、S Z06~08、S Z21、22、63D区S Z02・03など一つの周溝を共有しているものが存在したり、62J区S Z06は、他の周溝墓と重複していたりして、色々な様子が見られる。おそらく血縁的な結びつきによるものであろう。62B区S Z02は一辺16mと大きく、他のものとは異なり、周溝の底より壺が3個体分出土している。一つの墓域の中に作られながらも大小の差があり、死者の階層差があったのだろうと思われる。中期から後期になるにつれて社会的変化が生じ、町田地区へも人々が生活し始めたのである。町田地区の東・西微高地と南東山地区との間に、内容的な差はみられないが、ある種の階層や社会的な役割があったのであろうか。その頃になって居住域が拡がったり、墓域が2つに分かれ、片方は古墳時代までお互いを切り合うことなく続いているところに勝川ムラの人々の特質があったことがわかる。そして勝川遺跡は庄内川中流域右岸の弥生時代の拠点集落という位置付けができる。

4. 弥生集落の動向

愛知県内の弥生時代の遺跡は数多く、学史的にみても有名なものが多い。ところが発掘調査の成果により遺跡の内容が明らかになっているものは、朝日遺跡⁽⁶⁾・阿弥陀寺遺跡⁽⁷⁾・見晴台遺跡⁽⁸⁾・高蔵遺跡⁽⁹⁾・瑞穂遺跡⁽¹⁰⁾などと少ないのが現状である。それらの遺跡と勝川遺跡とを対比しながら動向をみていくこととする。

阿弥陀寺遺跡は海部郡甚目寺町に所在し、中期中葉~後葉にかけての環濠集落である。見晴台遺跡は名古屋市南区に所在し、笠寺台地上に立地し、後期初頭~終末にかけての短い期間の環濠集落である。瑞穂遺跡は名古屋市瑞穂区に所在し、瑞穂台地に立地し、堅穴住居跡の存在が知られている。高蔵遺跡は名古屋市熱田区に所在し、熱田台地上に立地する前期~終末期まで存続する拠点集落であり、前期の環濠が知られている。朝日遺跡や阿弥陀寺遺跡は、尾張平野の低湿地に相当する所であり、見晴台遺跡や瑞穂遺跡・高蔵遺跡は台地上にあり、いずれもかなり近接して存在する。それらの中で居住域・墓域・水田などの生活の様子を知るには断片的なものが多く、従って比較的よく解っている朝日遺跡をとりあげて考えていきたい。

朝日遺跡は西春日井郡清洲町に所在し、沖積地の微高地上に立地する著名な遺跡であり、高蔵遺跡より若干遅れてムラが成立し、終末期まで存続する拠点集落であり、しかも東海地方を代表する遺跡である。昭和44年以来発掘調査が実施され、環濠や堅穴住居跡・方形周溝墓が確認でき80万m²の遺跡範囲が推定され、時期ごとにその変化が把えられている。前期~中期初頭では、小貝塚群（貝殻山貝

塚など)を形成し、海の幸を多く食料としていた稻作農耕民であつただろう。中期初頭までには、「谷C」を挟んで南微高地と北微高地の2ヶ所に居住域が形成される。中期前葉～中期後葉では北微高地のみに環濠が設定され、「谷Bと谷C」の反対の東微高地や北微高地の西側に2つの墓域(東墓域・西墓域といふ)が形成されて、ここで朝日遺跡の成立期となる。両墓域をさらにみていくと、東墓域では方形周溝墓群で構成され、規模の大きさの較差が大きい。西墓域では方形周溝墓・土壙墓・土器棺で構成され、方形周溝墓の較差が小さい。その両者の差異を石黒立人氏⁽¹¹⁾は集団差として把えている。中期末葉～後期では東墓域で造墓活動が停止され、西墓域では重複し合う程に方形周溝墓が造営されている。また南集落の西側に新しく方形周溝墓が出現したり、埋葬主体が単葬から多葬になったり、供献土器の増加がみられたりする。堅穴住居跡では方形・円形の2つの平面形態から円形が消失し、すべて隅円方形堅穴住居跡になる。北・南集落に環濠がつくられ、2つの居住域が濠で囲まれてしまう。後期終末頃をもって集落が途絶えてしまい、朝日ムラの役割りが他の遺跡へ移動したためであろうと石黒氏は考えている。

朝日ムラと勝川ムラをみていこう。両者とも庄内川流域右岸であつて勝川ムラは中流の標高14mの台地上で、朝日ムラは下流の標高2mの低湿地に立地している。遺跡の出現は朝日ムラが前期で勝川ムラは中期である。両者とも中期後半頃と後期終末に大きな変化がみられる。2つの墓域の形成が朝日ムラにみられ、勝川ムラでも62J区・63A区周辺一帯と町田地区と墓域が分かれている。居住域は南・北集落の「谷C」を挟んで共存していく、勝川ムラでも南東山地区と町田地区と拡がっている。朝日ムラでは、西墓域では後期初頭頃から方形周溝墓が重複し始めることや、南集落の西に墓域が出現してくる。勝川ムラでは、62J区S Z 06の重複するものや、63A区や63D区の2方向に墓域が形成されていく。勝川ムラでも中期までの方形周溝墓は供献土器がほとんどみられないが、後期になると壺・高杯を中心とする供献土器が増加する。朝日ムラでは弥生時代をもって廃絶されるようであるが、勝川ムラではS Z 10・S Z 11のように古墳時代の方形周溝墓やS Z 13の円墳が造営され、墓域としての役割がしばらく存続していく。居住域では町田地区にしばらく住むが、須恵器出現期頃までには廃絶してしまう。弥生時代から古墳時代にかけて新しい社会体制が畿内より導入され、海岸部に近い朝日ムラでは、新天地にそのまま移動したのであろうし、内陸部の勝川ムラは若干遅れたのであろう。

愛知県内の弥生時代の遺跡の動向は、朝日遺跡や勝川遺跡のような実態を示しながらも海岸部や内陸部、沖積地や台地などの立地によって多少の差異が生じているのであろう。そういう差をみていくと、1つの遺跡ではよく解らないことでも全体としてみると究明できことがある。そういう事実の積み重ねを検討しながら今後、東海地方における弥生時代を考えていきたい。今後の弥生時代研究の一助となれば幸いである。

(註)

- (1) 編年基準としては、加藤安信編『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982年を骨組として考えていく。その中の第III～V形式を弥生時代中期、第VI～VII形式を後期とここでは取り扱った。
- (2) 野口哲也・他「勝川遺跡」『年報一昭和63年度一』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1989
- (3) 赤塚次郎・樋上昇他「勝川遺跡」『年報一昭和62年度一』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1988

- (4) 宮腰健司「尾張における“欠山式土器”とその前後」『欠山式土器とその前後—研究・報告編一』愛知考古学談話会 1987
赤塚次郎「逍遙する土器」『欠山式土器とその前後—研究・報告編一』愛知考古学談話会 1987
- (5) 北野信彦「濃尾平野における弥生遺跡の立地について」『古代文化』36—11 1984
- (6) 註(1)同じ。柴垣勇夫監修『朝日遺跡群第一次調査報告』愛知県教育委員会 1975
- (7) 石黒立人他「阿弥陀寺遺跡」、石黒立人他「阿弥陀寺遺跡II」、石黒立人他「阿弥陀寺遺跡III」『埋蔵文化財発掘調査年報 I ~ III』(財)愛知県教育サービスセンター 1983~1985
- (8) 水野裕之・野口泰子『見晴台遺跡第25次発掘調査の記録』名古屋市見晴台考古資料館 1988 など多数あり。
- (9) 重松和男編『高蔵貝塚III—1985年度夜寒地区発掘調査—』南山大学人類学博物館 1988 及び、高蔵遺跡出土の資料を重松和男氏の御厚意により実見・実測させて頂いた。他に文献多数あり。
- (10) 服部哲也編『瑞穂遺跡—第4次調査の概要—』名古屋市教育委員会 1987
- (11) 石黒立人「弥生社会の成立と解体の理解に向けて—伊勢湾沿岸における〈囲郭集落〉の出現と終末—」『考古学の広場』第3号 考古学フォーラム 1986
石黒立人「弥生時代尾張地方の〈囲郭集落〉について」『年報一昭和60年度—』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986
石黒立人「朝日遺跡の変遷と特質」『埋蔵文化財 愛知』No.8 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987

(参考文献)

- ・『春日井市史—本文編一』春日井市教育委員会 1963
- ・『春日井市史—資料編 (3)一』春日井市教育委員会 1973
- ・『南東山古墳・南東山遺跡』春日井市遺跡発掘調査報告第4集 春日井市教育委員会 1970
- ・『勝川』愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査報告書第1集 (財)愛知県教育サービスセンター 1984
- ・『勝川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第3集 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1988
- ・『特集 愛知県地方における初期弥生文化の様相』マージナル5号 愛知考古学談話会 1985
- ・『特集 弥生集落』マージナル8号 愛知考古学談話会 1988
- ・『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- ・『東日本における中期後半の弥生土器』第7回三県シンポジウム 1986
- ・『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』第23回埋蔵文化財研究会・第4回東海埋蔵文化財研究会 1988